

歴史術としての文化史学

—ブルクハルト史学における実用主義—

Jacob Burckhardt: Kulturgeschichte, Pragmatismus und Dilettantismus

森 田 猛

Takeshi MORITA

はじめに

ブルクハルトの後半生は、歴史教育者としての職務にささげられた。大学における講義、大学予科（ギムナジウム上級学年）における授業、大学や歴史協会等が主催した市民公開講演という三つの歴史教育活動が、彼のライフワークであった。これらは、相互に関連しながら、教養ある市民層の内実形成に寄与することが企図されていた。この職務に専心するため、ブルクハルトは『イタリア・ルネサンスの文化』公刊（1860年）以降の著作活動をすすんで断念した。そのような社会的実践を支える史学思想は、すでに処女作『コンスタンティヌス大帝の時代』（1853年刊）にあらわれている⁽¹⁾。それは彼の歴史家としての思想と行動を一貫して導き、文化史学という学問へと結晶した。これらを総合し、ブルクハルト史学の全体像を提示するためには、近現代の歴史研究が前提としている知的枠組み、すなわち歴史家の営為は科学研究の一部門たる歴史学研究にあるとする枠組みから、少し離れて考察する必要があるであろう。なぜならブルクハルトは、そのような枠組みを構築した歴史学の科学化・職業化過程を批判的にみていた歴史家であったからであり、また、それに依拠して彼を考察することが、文化史学がもつ教育的側面を看過させてきたからである⁽²⁾。そのような立場から本稿は、歴史教育という社会的実践の場で成立したことを重視しながら、ブルクハルト史学、とくに文化史学の史学的構造を分析するものである。ここで注目することは、文化史学がブルクハルト個人の歴史叙述法であっただけで

なく、学生や市民の聴講者と共有しようとした認識方法であったことであり、またそのような歴史認識の浸透に教育的作用を期待していたことである。以下、後期ブルクハルトの思想的立場を表明したものと評価できるニーチェ宛書簡の分析をてがかりに、この問題を論じていきたい。

1. 歴史病

1874年バーゼル大学における同僚ニーチェから『反時代的考察』第二篇（生に対する歴史の利益と弊害）を献呈されたブルクハルトは、この「力強く内容豊かな著書⁽³⁾」に対する礼状を書き送っている。この書簡は、レーヴィットによる哲学的研究『ブルクハルト—歴史のなかに立つ人間』以来、多くの研究者に基本史料として扱われてきた。この書簡が、時代の病弊「歴史病」に対する処方箋として、忘却する能力を称揚したニーチェに対して、歴史家ブルクハルトが歴史の弁明を試みたものとするレーヴィットの見方⁽⁴⁾は、今日なおも説得力をもっている。だが、レーヴィットの見解は、ニーチェとブルクハルトのその後の疎隔を注視し、永劫回帰にいたる後年のニーチェの超歴史的な立場から遡及して、この書簡内容を読み解いたものであった。その結果、両者の微妙な相違点を強調するあまり、二人が共有した問題意識については、十分な評価がなされていたとはいえない。さらに、ブルクハルトの返書が、あくまで特定の大学における「歴史の教師」の立場から書かれていることにも適切な注意が払われていない。したがって、ニーチェ宛書簡にこめられた意

図も再解釈の可能性を残しているといえるだろう。

『歴史の利益と弊害』におけるニーチェは、生に対する歴史の弊害だけではなく、その利益をも認識していた。歴史は人間を人間ならしめるものであり、その生に奉仕することができるとしている。ニーチェが提示した歴史の三種のあり方、記念碑的、古事的、批判的なあり方は、すべて歴史的知が生に奉仕し作用するときのかかわり方を示しているものである。同書におけるニーチェは、歴史の過剰がもたらす弊害と同時に歴史が生に対して「利益」をもちうることをも主張している。そのため、生の健康を回復すべく、非歴史的なものと歴史的なものの均衡点を探ることにこそ、彼の真のねらいがある⁽⁵⁾。ニーチェはブルクハルトを時代の病弊に罹患した歴史家としてではなく、そこから離れて立つことができた数少ない歴史家のひとりとみなしていた。彼の講義や公開講演を聴講し、歴史教育者としての活動の実際を同僚として間近に眺めてきた⁽⁶⁾。それらを勘案するとき、ニーチェがこの書を献呈したのは、ブルクハルトに対する挑戦ではなく、自分の問題提議を理解しうる稀有の人物に対して賛同を求めていることであつたと考えるべきであろう。

それゆえレーヴィットが克明に抽出した両者の思想的相違よりも、そのような差異を越えてなおも両者が共有した問題意識のほうが、ここでは重要である。それは、同時代の病的社会状況にかんする認識であり、ニーチェがいうところの「歴史病 *die historische Krankheit*」⁽⁷⁾であり、ブルクハルトの表現では「歴史的知識と人間能力の対立」⁽⁸⁾である。それらは歴史の知識が過剰にもたらされることによって、生が造形力を衰弱させ、もはや過去を滋養に富む糧として利用しえない状態になっていることを指している。それは「歴史の世紀」と称された19世紀に対する痛烈な批判であるといつてよいだろう。この批判はさらにつぎの三点の共通見解と不可分であつた。第一に、歴史が人間の生に対する作用をもつことであり、また生はその作用を必要としていること。第二に、この作用を阻害する歴史病は、歴史が科学 *Wissenschaft* となるべきであるとの要求が契機になっているということ。第三に、この歴史病が蔓延した19世紀においてもっとも困難なことは、人

間が「成熟する」ということである⁽⁹⁾。

歴史学の科学化過程は、独自の理念と専門的方法の確立・浸透を指している。同一の研究方法の普及は、歴史研究を集団化・組織化し、専門分化すること⁽¹⁰⁾を通して、膨大な科学知の提供を可能にした。しかし、ニーチェらによれば、これら歴史学の科学的成果はかえって生を圧迫し、新たな創造への意気を阻喪させているのである。このような問題状況を前に、歴史教育を生業とする者は、何をすべきであろうか。ニーチェ宛書簡は、まさにこの点に力点を置いた返書であつた。

わたしは大学予科の教師および大学の教授として、つぎのように言つてさしつかえないと思います。わたしは、世界史の名の下に重々しく理解されているようなもののためではなく、本質的に基礎的な学科として歴史を教えています。すなわち、その後に続くあらゆる種類の研究をゆるがないものとするために、不可欠な土台を聴講者に授けなければなりません。彼らが何らかの類いの過去をわがものとする、少なくともそうすることが嫌にならないよう、できる限りのことをしてきました。わたしが望んだことは、彼らが自らの力で成果を摘むことを学ぶことであつて、狭い意味での学者や弟子を育てるようなことはまったく考えませんでした。求めてきたことは、すべての聴講者が信念と希望を抱くことのみです。個人的に関心をもつ過去は、自力で自らのものにするのできるものです。そして、そうすることには何かしらの幸福が宿っていることでしょう。もちろん、そのように努めることが、ディレッタントイズム *Dilettantismus* へと導くものとして非難されるかもしれぬことも、はっきりと承知しています。そして、それを甘受しています⁽¹¹⁾。

この書簡において表明された歴史教育者の立場は、一見ささやかなもののようにみえる。その目標とするところは、歴史の究極の目的を大胆に思料するヘーゲル的な「世界史」ではなく、その後の学修基盤となるような基礎教育としての歴史教育におかれている。そして、教師の役割は、歴史の研究者を育てるための専門教育を施すことではなく、個々の聴講者が主体的に歴史を修得できる

よう助力することにある。教育主体とみなされる聴講者は、歴史を学ぶことによって、信念、希望という生の指針を確立することができるとしている。ここで、聴講者が学ぶ過去とは、無限大に広がった過去全体ではなく、個々の主体が「関心をもつ」ことができるような特定の過去を指していることに注意しなければならない。主体の関心に応じて、その学びは個性的な性格を帯びるであろう。そのような歴史教育が目指す方向は「ディレクタントイズム」と表現されている。ブルクハルトが多用するこの言葉⁽¹²⁾には、微妙なしかし重要なニュアンスがこめられている。そこに彼が立った史学史上の特別な位置と文化史学の本質が深くかかわっているのである。

2. 歴史認識の性質と作用

ニーチェとの接点、歴史の科学化への批判は、ブルクハルトを19世紀歴史学界のなかで特異な位置においた。彼は当時「歴史はもっとも非科学的な学問である」と明言したほとんど唯一の歴史家である。ブルクハルトが歴史の科学モデルへの完全順応を拒むのは、歴史にいかなる性質をみえたためであろうか。彼が歴史の非科学性を指摘しているのは、史料の批判的研究にかんしてではなく、その上に構築される叙述と、史料研究以前に行われる認識対象の選択にかんする部分においてである⁽¹³⁾。すなわち何を記憶すべきか、どのように物語るかという歴史学の根幹には、批判的方法の存在にもかかわらず、依然として科学的な手続きの手が及ばない箇所が残されているのである。科学は何を知りうるかを提示することができるが、何を知るべきかを示すことができない。無数に存在する過去の出来事のなかから認識すべき対象を選び出すことと、その対象を特定の仕方で叙述すること、この両者をまったく価値自由な合理的手続きだけで行うことはできないのである。ブルクハルトは、この点に歴史学がもつ危険性を認識しながらも、それを弱点とはみなしていなかった。「もっとも非科学的」という表現は、超科学的な歴史学の可能性をも示唆しているのである。

科学の領域を超えたところにあるものとは、何であろうか。ブルクハルトは、科学に対して最高

の対照と補償をなすものとして、芸術を考えている。この二つの文化領域の対照性はつぎの点におかれている。すなわち、科学はそれが存在する以前から存在するものを収集し、体系化するものである。一方、芸術は、それが存在しなければ存在しないであろう高次の生命を叙述するものである⁽¹⁴⁾。芸術はそれゆえ科学的な認識方法によって解き明かすことのできない謎めいた本質をもっているのである。ブルクハルトはさらに各領域の淵源に、哲学と詩を布置している。特殊科学が個別の知識を獲得するのに対して、哲学は全体的な認識を試行し、それは人間をふくむ世界全体を考察するものであるが、存在の最高法則を永遠にすなわち哲学以前にも存在するものとして究明する点で、科学に近い位置にある⁽¹⁵⁾。一方、詩は、哲学と芸術の間の「高貴な中間」に位置し、言語を用い、数多くの事実と接触する点で科学に近く、世界を解釈する点で哲学と共通項をもつが、表現の具象性、みずから創造者である点で芸術の一領域とみなされる⁽¹⁶⁾。これらの領域はそれぞれ独自の原理が支配しており、固有の表現内容を有している。近接領域であるはずの哲学と詩の間にも越えがたい距離が横たわっている。ブルクハルトはアイスキュロスのプロメテウスをもってそれを例示している⁽¹⁷⁾。

このような文化領域地図のなかで歴史がおかれている位置は、哲学および詩という科学外の近接領域との対比によって、見定めることができるであろう。歴史と哲学を対比するとき、ブルクハルトは、ケンタウロスの比喻を用いて歴史哲学を批判したように、対照性を強調する。哲学は普遍的な人生の謎をじかに解明しようとするが、歴史はそのような目的には不十分にあるいは間接的にしか寄与することができない。歴史は並列を許容する点において非哲学的であり、哲学は序列をなす点において非歴史的である⁽¹⁸⁾。哲学が用いる概念は固定し完結しているが、歴史のそれは流動的開放的でなければならない。なぜなら歴史の領域は、すべてが漂いたえず移り行き入り混じって存在するようなものだからである⁽¹⁹⁾。ブルクハルトは、哲学と歴史を、それぞれ別種の認識能力に依拠した知的営為とみなしているのである。

一方、歴史と詩との対比においては、アリスト

テレスやショーペンハウアーが行った歴史と詩の序列論争を紹介している。すなわち、アリストテレスは、詩が普遍を認識し、歴史は個別を認識するため、前者は後者よりもいっそう深いものであるとし⁽²⁰⁾、詩人の能力は歴史家の能力よりもいっそう高く、詩がおよぼす作用も歴史の作用よりも高いと考えた。ショーペンハウアーも、詩が人間の本質を認識することについて、歴史よりも多くの寄与をなすものとして、詩が優位に立つとの判定を下した。ブルクハルトは、これらの見方に対する賛否を差し控えている。「歴史は詩のなかにもっとも重要で、もっとも純粹かつ確かな原史料を見出す⁽²¹⁾」と、両者の関係性を説くのみである。だが、そのような関係が成立するためには、両者の根底に何らかの共有物が存在しなくてはならない。

ブルクハルトは、偉大な詩人の創作に人間の本質や時代的国民的なものの永遠の形象をみるが、それは偶然的なものの寄せ集めとは無縁な、偉大で意味深く美しいものを集めて浄化した精神の世界像であった⁽²²⁾。日常のなかで気づかれることもなくあわただしく過ぎ去っていくものが、詩人の精神を通して第二の高次の地上的存在へと結晶化する。それは創造的発見ともいうべきもので、詩が成立する以前には存在しなかった美がそこにあるのである。形象の創造と受容には精神の諸力が介在する。そのため形象は一義的な意味や単一の作用をもつにとどまらない。受容する精神を介して、新たな意味を発見され、異なる作用力をも獲得していくものである。そのような創造的受容の例として、ブルクハルトはソフォクレスの後代に対する作用をあげているが、それに並べて、トゥキディデスのなかに今後百年を経過してようやく認識されるような第一級の史実が存在するということもありうる⁽²³⁾、と述べていることは注目に値する。

歴史的世界を無数の因果関係で構築されたものとしてとらえ、それらを合理的に解明することを目的とする場合、歴史と詩はまったく異なる分野として取り扱われることになるだろう。だが、ブルクハルトにとって、歴史的世界は、たえず構築と破壊を繰り返し、ときには偽装し幻惑するような複雑な生の形態によって構成されていた。それ

らは明澄な思惟よりも、想像力をともなうほのかな感情に導かれることが多く⁽²⁴⁾、認識する者の眼には、多くの「謎⁽²⁵⁾」と「神秘⁽²⁶⁾」に満ちている。それらを全体としてとらえようとするとき、歴史認識は詩と類似の認識過程を必要としたのである。ブルクハルトは、それを精神の「化学的結合 die chemische Verbindung⁽²⁷⁾」と表現している。過去の精神と現在の精神とが生き生きと交流することによって、新たな意味と作用を見出す過程である。それは、現在の精神が、恣意的に何かを引き出すことでもなければ、過去の精神が一方的に何かを押し付けるものでもない。双方の精神が邂逅することによって生じる化学的ともいえる内的変容を通して、創造的に受容するのである。

ここで用いられるものは、批判や思弁ではなく、むしろ直観 Anschauung と想像力 Phantasie であった⁽²⁸⁾。直観は、主客の相互作用の上になりたつ認識手段であり、知性とは異なる形で一挙に事物の本質的内容をとらえることができる。想像力は、直観がとらえたものの不足、間隙を創造的に埋めることによって全体像を構成し、認識主体との親和的な関係を構築していく。対象はこうして内側に受容されるが、そのような内的経験の過程を通して得られた意味連関は、生の内奥にかかわることができる。それゆえ、現在の生にとって教示に満ちたものであり、力強く作用する力をもっているのである。このような歴史の生に対する作用を重視する立場を、ブルクハルトは「実用主義 der Pragmatismus⁽²⁹⁾」という言葉で表現し、それを高次かつ広範にとらえることに、現代における歴史的知が向かうべき方向を感得していたのである。

3. 歴史の実用主義―古代ギリシア史学の模範

科学化した近代歴史学に対するブルクハルトの批判を支えたものは、歴史の実用主義に対する信頼であったが、彼はこれをヨーロッパの歴史叙述の伝統的系譜に位置づけていた。その典型は、古代ギリシアにおける歴史叙述であり、ヘロドトスからトゥキディデスにいたる歴史家たちは、この実用主義の伝統を継承している点で共通していた⁽³⁰⁾。あらゆる精神的なものの頂点を古代ギリ

シアにおくブルクハルトは、諸学のなかでとりわけ歴史学におけるギリシア文化の優位を認めていた。

ギリシア史学における実用主義とは、いかなるものであったであろうか。それは、探究心をもった自由な市民の精神と精神との邂逅によって成立するものであった。たとえばトゥキュディデスは、真理への愛をもって厳正なる客観性にに基づいた歴史叙述を人々の「たえざる研究に資するために」行う。それを受け取る人々は、自分たちに必要な将来の教訓を自由な探究精神を通して、歴史叙述から引き出すのである。これらは、無報酬の私的営為として行われた。ブルクハルトが強調するものは、この過程における精神の介在である。トゥキュディデスは、報告された一切を専門家として熟慮するだけでなく、さらにそれを「自分の精神を通らせる durch seinen Geist gehen zu lassen⁽³¹⁾」という能力を有していたという。彼が描き出す歴史像はたんなる正確な事実の集積ではなく、ことの経過、原因と結果を網羅した広範な全体に対する見通しを示すものであった。それは彼の成熟した精神を通して結ばれた歴史像であったからこそ、達成しえたものである。ブルクハルトがトゥキュディデスにおいて注目する特徴は、史料批判的な厳密さではなく、精神を介した包括的な全体像にある。そのため、ブルクハルトは、トゥキュディデスとヘロドトスとの間にある史料操作上の差異をあまり重視していない⁽³²⁾。その視線はむしろ、両者が共有するものに、そそがれているのである。

二人の歴史家が共有するものとは、歴史叙述の実用主義的性格であり、また、そのために類型的なものの見方を随所に用いている点である。目に見える世界を把握し理解しようとするとき、古代ギリシア人は、類型的なものを通してそれを実現してきた⁽³³⁾。そのことは、厳密な客観的政治史を著したとされるトゥキュディデスにおいてすら、適用されるのである。総合的な政治史叙述において重要な叙述対象は、諸々の出来事だけではなく、それを引き起こした行動の源泉、心的態度であるが、彼はそれを登場人物の演説に盛り込んでいる。しかも、その人物が実際に語ったかどうかにしたがってではなく、彼がおかれた状況に一番ふさわしいことを語らせるという手法をとっていた⁽³⁴⁾。

その場合、その人物は、歴史上の人物としてだけではなく、類型的人物の相貌をも同時に兼ね備えている。その行動は、同じような心情の持ち主が、同様の状況におかれたときにとるかもしれない行動のひとつとしてみることでできよう。

このような叙述における類型性は、ヘロドトスにおいていっそう顕著であった。彼が歴史叙述において多用する逸話は、まさに類型的なものを表現する手段である⁽³⁵⁾。それはいつどこで誰がという出来事をめぐる正確さにおいては、一度も真実であったことはないが、人間の特徴や内的本質を表しているという意味においては、永遠に真実なものをふくんでいる。逸話は口頭による伝承の過程で、多くの人々の内面を通して成長した物語である。伝承の過程で外的な詳細や整合性は次第に失われていくが、それだけいっそう内面的な意味性においては深化し、ふるいかけられたものへと変容をとげている。それが伝えるものは、より普遍性を帯びた人間的なもののエッセンスである。現代の批判的立場からすれば、これはもはや通常の意味における歴史ではないであろう。だが、それは内面において観られた歴史「もうひとつの歴史 *historia altera*⁽³⁶⁾」であり、人間の可能性と特色を豊かに語る力をもっているのである。

歴史叙述にみられる類型的な見方は、ギリシア人の生活に根差したものであり、彼らが共有した独特の世界観と無関係ではない。ベーク Philipp August Boeckh の指摘にあるように、ギリシア人は多くの人が信じているよりも不幸であった。力強く創造的であった天才民族の地上生活は、暗いペシミズムと表裏一体であり、彼らにとってこの地上は、できるだけすみやかに立ち去るべき場所であった⁽³⁷⁾。彼らが関心を寄せるものは、不完全な地上の事物ではなく、それらの下で発揮される人間の力である。そのような民族にとって、事物に忠実な「正確なもの」よりも、人間的なものに深くかかわる「類型的なもの」の方が、世界をとらえる理解形式として適合的であったといえるだろう。注目すべきことは、このような見方が、視野の狭さや偏見にギリシア人を導いたのではないということである。むしろ彼らが客観的な世界認識を創始したことをブルクハルトは強調する⁽³⁸⁾。

そのような世界認識の広い視野と客観性は、類

型的なものといかなる関係にあったであろうか。類型は、外界にそれ自体として存在するものではなく、認識するものの内面を通して結ばれた形象であった。それによって無数にある事象は、ひとつのまとまりのある理解可能な形象に統合されるだろう。視野の拡大は、認識対象を増大させることによって、ともすれば視界を混沌とさせ、その組織化を困難にする。しかし、類型的な認識による限り、視野が拡大したとしても認識世界の無秩序には導かれないのである。そのような内面を介した見方は、事物に対する認識者の関係を精神化することができる。すなわち類型を求める視野において、事物はより一般的なものを代表するものとして、その個性・固有性を希釈されている。そのため、判断の客観性を脅かす利害関係が介入してくる危険性が、より少ないといえるであろう。それは事物に対するより公平な基準をもたすことができる。さらに類型的なものは内界と外界とを媒介する役割をも果たしている。内面において観られた類型は、外界の個別事象と緩やかな関係をもちながら、人間の個人的集团的特色や内的能力を歴史像のなかに豊かに盛り込む。それにより、人間の心的態度や特色と外的な出来事の関係について、深く洞察することも可能にしたのである。ブルクハルトはこのような「内的因果関係」の指摘に、ギリシア史学における実用主義の一頂点をみる⁽³⁹⁾。かつて起きた出来事は、過ぎ去ったものではない。知るに値することを教え、いまも働きかける生きた力なのである。まさに「歴史は人生の教師」であった古代ギリシアにおける歴史と生の関係、この実用主義の輝かしい形姿に、ブルクハルトはヨーロッパにおける歴史的知の理想をおいたのである。

4. 文化史学の立場―出来事から類型的なものへ

普仏戦争のさなか、1870年大みそかの友人ブレン宛書簡において、ブルクハルトはつぎのように書き送っている。

歴史の大学教師として、まったく注目すべき現象があきらかとなりました。すなわち過去のたんなる「出来事Ereignisse」の一切が突如、無価値に

なったということ。今後、わたしの講義は文化史的なものを強調し、外的な骨格は必要最小限のものだけにとどめておくことにします⁽⁴⁰⁾。

翌1871年11月に市民に対する公開講演「世界史における幸福と不幸」を講じ、1872年には長年準備を進めてきた講義「ギリシア文化史」を開講することを考え合わせたとき、1870年末のこの書簡は、ブルクハルトの「文化史学宣言」というべきものとして評価できるであろう⁽⁴¹⁾。歴史教育者としてのブルクハルトを導いてきたものは、古代ギリシア史学を模範とする歴史の実用主義であったが、彼の念頭にあったことは、自分たちが古代ギリシアのポリスとはまったく異なる政治制度、社会的状況の下にあるという事実である。とりわけトゥキュディデスが立った社会的基盤との相違を強く意識していたブルクハルトにとって、普仏戦争の勃発は決定的な意味をもった。それはヨーロッパがこれまでにない時代に突入したことを確信させたからである。ここにおいて彼はトゥキュディデスのような出来事にかんする厳正な客観的研究と実用主義との両立を、最終的に断念したものである⁽⁴²⁾。そこからブルクハルトは、歴史の実用主義の現代的方法すなわち文化史学による歴史教育の実践を決意するのである。

ブルクハルトにおける文化史の対立概念は、政治史ではなく出来事の歴史である⁽⁴³⁾。文化史とは、それが認識対象とする人間の活動領域を指す概念ではなく、認識対象の位相を指すものであるといえよう。出来事の歴史とは、地上に生じたさまざまな事件、現象をその個性において認識するものであり、通常の歴史学がそれにあたる。すなわちいつどこで誰が何をしたかという出来事を他から区別する固有の属性において正確に認識し、個別事象同士の時系列的因果関係を解明していく。このような出来事の歴史が、基礎教育的な歴史教育を行う大学教師からみて、無価値となったと判断したのである。

出来事の無価値化には、二つの異なるレベルの近代的变化がかかわっている。第一に、学問内的状況の変化である。科学化した近代歴史学は、その対象を認識主体から切り離し、批判的な専門的方法で稠密に精査することによって、その正確性

を高度に高めていった。生から切り離され科学という普遍的構築物に貢献する歴史的知は、無制約に増大する傾向をもつ。科学化に引き続いて起きた職業化、すなわち歴史研究の専門職化は、専門分化を促進し、知の拡大をいっそう加速させた。それは精緻な専門知の大量生産を可能にしたが、その一方で知の全体性喪失、専門の科学世界と一般の生活世界との乖離という副産物を生んだ。専門研究者が究明する出来事は、知の全体や生活世界とのつながりを切断され、「瓦礫」化への道をたどっていく。そのような出来事の探究に基づく限り、大学における歴史教育の実践は「危機⁽⁴⁴⁾」に陥らざるをえないといえるだろう。

第二に、出来事そのものの質的变化、すなわちヨーロッパの歴史的土壌の変質によるものである⁽⁴⁵⁾。普仏戦争は、尋常ならざるレベルにまで巨大化した国家権力同士が、さらなる拡大を目指して激突したものであった。国民国家という名の大国は、国民の下から要求を吸収しながら現実世界における支配権を拡張するが、やがてこれは強制的均一化を通してヨーロッパの旧社会制度を根底から解体していくことになる。古いヨーロッパは、小国家や身分社会、諸団体などさまざまな中間権力に仕切られつつ、多様性を許容する歴史的土壌をもっていた。そこで実現したものは、ヨーロッパ的な自由であり、それは一定の制限の下において追求される精神的自由であった。そこにおいて個は、闘争を通して自らの本性を意識的に伸張し、個と個のみならず、個と全体が緊張ある動的な調和を構成していた。その調和は古代ギリシア以来の精神的連続性を共有することによって由来する。そのためヨーロッパ史における出来事の基底にはつねに精神的なるもの、普遍的なるものを垣間見ることができた。その限りにおいて、ルネサンス期イタリアにおけるように、出来事の精査に基づいて市民が「市民のために書く⁽⁴⁶⁾」実用主義的な歴史叙述もなお可能であった。だが、旧社会が解体するとき、出来事にみられた普遍性も消失し、そのような歴史的知の基盤は失われてしまったのである。

出来事に代わって歴史の実用性を担う認識対象が、文化史的事実である。ブルクハルトは、その特性を「繰り返すもの、恒常的なもの、類型的な

もの⁽⁴⁷⁾」と表現している。これらは同一のものをそれぞれ異なる観点から表現したものであり、一回限りのもの、過ぎ去るもの、個別的なものという出来事の属性と対照をなしている。具体的には過去の人々のものの見方や考え方であり、実際に起きた出来事は、その個的表出と位置づけられよう。この文化史的事実は、出来事よりも歴史教育の目的に適ったものと考えられた。なぜならそれは、個々の偶然的な出来事に左右されず、均整のとれた全体性を保ち、また、人間の内面に作用することができるためである。文化史的事実はその類型性を通して、人間の特質や本質を永遠の形象として照らし出す。そのような類型的なものは、精神の化学的結合機能を介して、創造的に認識されたものである。ここにおいてブルクハルトは、ヘロドトスの「もうひとつの歴史」に近い位置に立っている。それは、一般の歴史研究と区別される「歴史的なもの Geschichtliche⁽⁴⁸⁾」の研究であり、過去の人々の内面に認識の眼を向けていることを特徴とする⁽⁴⁹⁾。

史料を読解し、数多くの出来事とかかわることにおいて、文化史学の認識作業は、通常の歴史学のそれと大きな差異はない。しかし、史料の読み方、出来事に対する視点において決定的な相違がある。というのは、文化史的事実は出来事から離れて別個に存在するのではなく、そのなかに内在しているからである。通常の歴史学は、出来事の歴史的側面、一回限りで過ぎ去る部分に目を向けているが、文化史学は、出来事がもつ精神的側面、それが一部をなしている、より大きな全体に視線をそそいでいる。そこにみられるものは、過去から現在にいたるまで生き続ける人間精神の働きである。それは変転するが過ぎ去らない性格にあずかっており⁽⁵⁰⁾、みるものの眼には、類型的なものとして繰り返し立ち現れる。精神的な存在を認識するものは、個々人にそなわっている認識力としての精神である。それをういたとき、過去の精神は同質のものであれ、対照的なものであれ、感得することができ、理解することができるものとなる⁽⁵¹⁾。そのような内在する精神を認識しようとするとき、認識者は通常の歴史認識とは異なる視点から出来事を眺めているのである。

1871年の公開講演「世界史における幸福と不

幸」は、通常の歴史認識が立つ視点から、文化史的な視点への移行を見事に描いたものとみることができる。この講演で、ブルクハルトは自分たちが歴史認識において、幸福と不幸という二つの観念にしたがって判断すること、そして、その実例をあげながら判断基準の根底にエゴイズムという共通源泉が横たわっていることを指摘する⁽⁵²⁾。その際、利己的な願望を過去に投影したにすぎない幸福観念の正当性は迷わず否定するが、不幸という観念については、その存立を否認しない⁽⁵³⁾。なぜなら、彼の眼には地上における悪の存在があまりに大きく映るからであり、強者の弱者に対する暴力行為や搾取は、枚挙に暇がないからである。講演の後半は、悪の栄えに向けられた苦情に対して、さまざまな慰めの可能性を考察することに費やされている⁽⁵⁴⁾。すなわち、破壊のあとの文化の若返り、別の面からの埋め合わせといった神秘的ともいえる世界史の法則を検討することによって、無残に破壊されたものの価値救済を試みているのである。探索の過程で、15世紀において古代ギリシアの芸術作品が過剰に発見されなかったこと、そのためラファエロらイタリア・ルネサンスの芸術家たちは古代に創作を刺激されることはあっても、圧倒されることがなかった、という事実につきあたる。そこで突如ブルクハルトは「ここでわたしたちは立ち止まるべきであろう。わたしたちは知らず知らずのうちに幸不幸の問題から人間精神の生き続ける事実にあたっているのである⁽⁵⁵⁾」と、問題の次元が変化していることを聴衆に告げ知らせる。文化史的認識の境域に足を踏み入れたことに気づいた瞬間である。

慰めの法則を模索する過程をつぶさに観察すると、ブルクハルトが聴衆をより高い次元に少しずつ導いていることに気づく。若返りや埋め合わせという法則の有効性を見定めようとするとき、遠く隔たった事象間の関係性を考察し、歴史を巨視的にみなければならない。それゆえ通常の歴史認識におけるよりも長い時間軸で考察し、いっそう広い視野から全体を見通すことが必要となってくる。それを可能とするためには、認識者がより高い視点に立つことが必要条件となるだろう。慰めの法則を探索していくにしたがい、事象を個別性において認識する視点を離れて、より普遍的なも

のを認識する視点へと上昇していくことになる。それにともない認識者の判断基準や自己認識さえもが変容していく。当初、認識者が立っていたのは、「時代や個人の不安が支配⁽⁵⁶⁾」し、幸不幸が重要な問題となる領域であった。だが、視点の上昇によって、彼が足を踏み入れるのは、自らの個人性を忘却するような境域である。その地点で「いっそう遠くから落ち着いた考察をする⁽⁵⁷⁾」認識者の眼に、地上の営みはその実相を開示する。それは「すばらしい光景⁽⁵⁸⁾」であり、その浄福に満ちた認識を知った者には、もはや幸不幸の問題は些事と思われてくる。高次の認識は、たんなる認識技法ではない。地上の事物をそれが値する以上に評価しない、いっそう「公正な」世界観を前提とし、またそれを結果するものである。講演の末尾を飾る純粋な認識への憧憬は、そのことを如実に物語っているのである。

5. 類型的なものの機能

文化史学が認識対象とする類型的なものは、歴史の実用性とどのような関係にあったのであろうか。ここで、古代ギリシア史学における類型的なものが、精神の介在によって創造的に受容されたものであったことを想起しなくてはならない。したがって、類型的なものは、認識主体との関係から考究することが適切であろう。認識主体が、歴史のなかに類型的なものを認めるとき、その類型を代表する歴史的人物の具体的な言動として、それはあらわれる。たとえばルネサンス人の多面性は、レオン・バティスタ・アルベルティの多方面にわたる輝かしい経歴と「人間は意欲しさえすれば、何でもなしえる」という彼の象徴的な言葉によって表現される⁽⁵⁹⁾。だが、それはアルベルティその人の個性を描写するのではなく、その人物の形姿を通して、ルネサンス期に生きた多面的な人々の考え方や能力を映し出すのである。そのため、ダ・ヴィンチのような例外的な偉人ではなく、アルベルティのような標準人が類型的の中心におかれる。それを通して、あの時代のイタリアのいたるところに、多面的な人物が存在したことが間接的に形象化されている⁽⁶⁰⁾。それは、ルネサンス期における多面性についての抽象的な概念を与え

るのではなく、多面性なるものの具体的な形象を認識者に与えているのである⁽⁶¹⁾。

近代的知性が多用する抽象的概念と類型的なものは峻別されなければならない。ブルクハルトは対象を眺める精神の感受機能を二種類に分けている。ひとつは、対象を考察し比較し分解するというものであり、いまひとつは、偉大なものに共感し、その巨大な像を受容するものとしている⁽⁶²⁾。概念は前者に用いられ、類型は後者に対応すると考えられよう。認識主体にとって概念は、知性が案出した知的道具であり、生の外側に位置している。それは具体的な生から切り離され抽象化されているがゆえに、高度な客観性を保持しており、そのため、事象の比較・分析や理論構築などあらゆる認識主体の知的操作に応じることができる。このような操作は、認識主体から対象に向けて行われるものであり、認識主体へと遡及することはない。

一方、類型的なものは、認識主体と対象との相互作用上に成立するものであり、生の内側に位置しているといえる。主体の内実によってその内容を微妙に異にするが、その可変的な形象を通して生の内側に作用する力をもっている。認識主体は、類型的なものをあらかず人物の姿に自らを同化する形で、その人物の内面に生じたであろうものを体験することができる。類型的なものをあらかず人物は、いつかどこかで現れるかもしれないような相貌をあわせもっており、このような繰り返す時間を組み込む類型性は、過去の他者経験をいま現在のわたくしにつなげる。認識主体は、その人物を他者として冷淡に認識するのではなく、その人物の意欲や苦悩を自分のものとしてまざまざと実感するであろう。なぜなら、その類型的人物が経験する苦闘は、地上的存在の誰もが共通して出会う何ものであるからである⁽⁶³⁾。

ここでブルクハルトが、文化史の歴史考察方法を「情念論的 pathologisch⁽⁶⁴⁾」と表現したことに注目したい。類型的人物の与える形象は、認識者の経験世界にじかに接続することができるものであり、情念を揺り動かし共感しつつ受容することが可能なものである。これは歴史を知的に認識するだけでなく、直観や想像力といった内的な諸力すべてを投入して経験することにほかならない。

だが、それは、情緒的に揺さぶられ、いたずらに全体への見通しを失うことを意味していない。なぜなら、その経験は類型的に高められた性格を帯びたものであり、地上的な情動に揺り動かされる側面と同時に、高所から眺めた鎮静の側面を内包しているからである。この歴史考察は、やがて自身の実経験をもそのような視点から眺めることに慣れさせるだろう。「かつては喜びや悲しみであったことが、いまや認識とならなければならない⁽⁶⁵⁾」とブルクハルトが述べる時、情動の揺れを通していつそう深い人間知が語られている。類型的なものを通して、人は自他の経験を高い意味において、自分のものとすることができるのである。

その際、類型的なものが、人間精神の歩みを最高の充実においてあらわしたものであるがゆえに、その中心に偉大さをたたえたものであることは、注目に値する。認識主体にとって、それは自分よりも高次の存在であり、畏敬の対象となりうる。相手に畏敬の念をいだくとき、そのすぐれた特性を尊重することは必然である。認識者は、既成の判断基準をもって畏敬対象を計測し、自分の利害に応じて部分的に利用するような粗雑な扱いはしない。むしろ従来の見方や基準を組み替えてでも、その対象が示すものすべてを受容しようと努めるであろう。偉大なものは、人間の特性の幅を広げ、その内的な本質と能力を高みに引き上げた存在である。そのような高次のものを全的に理解しようとするとき、認識主体もまた内的条件を高いものへと組み替えていく必要がある。ブルクハルトが「歴史的経験⁽⁶⁶⁾」と呼んだこれらの認識行為は、過去の数多くの時間的経験から浮かび上がる類型的なものを「精神的所有⁽⁶⁷⁾」とすること、つまり内的に統合することを通して、認識主体が変容をとげることを目指しているのである⁽⁶⁸⁾。したがって、そのような過程の延長線上に、歴史教育の目的もおかれることになるであろう。すなわち「成熟することこそすべてである⁽⁶⁹⁾」と。

この成熟という内面的価値が、歴史病の蔓延する19世紀において、もっとも実現困難なものであると、ブルクハルトが判断していたことはすでに述べた。歴史的知が生を疎外する歴史病の時代に、彼は類型的なものを通して歴史をふたたび生の内

側に作用させようとした。そこでは歴史は外界に存在するものではなく、内的体験として存在する。それゆえ、歴史は内面世界を構築する原理となりうるが、それだけにとどまらない。それが結果する個々人の内的変容を通して、やがては外的世界に作用を及ぼすことも可能なのである。フランス革命の経過は、このような内的因果関係の波及効果に眼を向けさせることになった。それこそが、「より高次かつ広範に把握された実用主義」の意味するところである。ブルクハルトはフランス革命以後の時代、「革命時代」の社会的状況そのものが、人心を歴史的知へと駆り立てる性質をもっていることを指摘する⁽⁷⁰⁾。たえず変動し、すべてが暫定的で、安定性をいichじるしく欠く社会において求められたのは、生の指針を与えることができる内的原理としての歴史であった。典型的なものは、そのような時代の必然性に応える力をもっていたのである。

6. 文化史学の構造的特質

文化史学の史的構造は、その機能である類型的なものの内面化と不可分である。文化史学は、その機能を果たす上で、どのような内的装備を備えているであろうか。その観点から文化史学の構造的特質について素描を試みたい。ここでは文化史学の理論的支柱として周知の「三つのポテンツ」説と、文化史学の歴史像においてみられる「予感領域」の存在、この二点に焦点をあて論じることとしよう。

三つのポテンツ説の概略は、普遍的妥当性を要求する固定した二つの諸力、国家と宗教、さらにそのような妥当性を要求しない流動的な諸力、文化という三つのポテンツとそれらの相互作用から歴史を眺めるというものである。そのうち国家と宗教の聖俗権力の相互関係から歴史を叙述する視点は、オットー・フォン・フライジングからランケにいたるまでのヨーロッパの世界年代記に特徴的な基本形態をなしている⁽⁷¹⁾。ブルクハルトはランケ的な普遍史の伝統を継承しながら、そこに文化という第三の力を組み込むことによって、より自由な歴史に対する見方を提示したと考えてよいだろう。ポテンツ文化は、物質的精神的な自発

的行為の総体としてとらえられている⁽⁷²⁾。ここでブルクハルトは、哲学者エルンスト・フォン・ラゾー Ernst von Lasaulx と同様、農業や商工業、水運から市民的福祉、科学・芸術にいたるまでの幅広い分野を文化の領域に位置づけており、とりわけ国家・宗教に対する文化の外形式を広義の社会としている⁽⁷³⁾。社会は国家・宗教の権力による生の形成物をたえず分解する形でかわり、老朽化にいたったときにそれを知らせる時計の役割を果たしている。だが、彼は、ラゾーのように文化領域全体を系統発生的な一連なりとして理解してはいない。なぜならそのなかにある物質的要求によるものと精神的要求によるものとを厳しく区別しているからである⁽⁷⁴⁾。したがって、言語や芸術といった精神的なものの直接的な発露は、文化のなかにおいても特別な位置にある。いわば微妙な境界域をもつ二重構造の広域諸力が文化であるといえよう。そのような諸力をとりいれたとき、歴史認識はいかなる特質をもつであろうか。それはつぎの二点において指摘されよう。

第一に、上述のような自発的行為の総体である文化がとりいれられることにより、支配＝被支配関係によってはとらえきれない人間存在の自由な活動、とりわけ自由な精神的活動が、歴史像のなかに位置づけられることである。ブルクハルトは「ヨーロッパ的であるということは、たんなる権力、偶像、金銭ばかりでなく、精神をも愛することである⁽⁷⁵⁾」と講義において述べている。そのような地上的支配力に屈従しない精神的自由の土壌としてのヨーロッパ像は、文化を包摂した視界においてよりよく理解されるであろう。それは権力国家同士の勢力均衡を主軸としたヨーロッパ史像に修正を迫るものとなるはずである。さらに文化の作用を視野にとりいれるとき、歴史や時代に対する判断もまた別のものとなる。たとえば文化が聖俗権力の形成物を解体する力として理解されると、体制の衰微とみなされてきた事象は、文化の健全な力を示すものとみなすこともできるだろう。そのような複眼的な見方は、歴史に対する理解を重層化する。一見ひどい病魔に冒されているかにみえる国民が実は健康に近く、逆に強壮にみえた国民が深刻な死の萌芽をその内部に潜めているかもしれないというような深みのあるブルクハ

ルトの判断も、このような見方からきているものである⁽⁷⁶⁾。

第二に文化をふくむ三つのポテンツ間の相互規制関係を通して、歴史像の全体性が確保されることである。この全体性こそが、近代歴史学が喪失した最大のものであるとブルクハルトはみなしていた。文化史学において、国家が規制する文化、文化が規制する国家というようなポテンツ間の規制関係が六通り提示されている。それらは事象相互の位置関係、相互作用の洞察を容易にする。さらにまた、時代や民族を超えた類似の平行現象を数多く見通すことができ、通常の時系列的な縦断面からの考察よりも、さまざまな現象の核心に横たわる共通性を看取することができる⁽⁷⁷⁾。そのような横断面を通して歴史をみるとき、歴史像は、生き生きとした全体性を失うことなく、より多角的なものとなることができよう。それは、多数の類型的なものを布置した「壮大な連続体⁽⁷⁸⁾」をなしているのである。それを逐次的に言語によって叙述する難しさ、文化史叙述特有の困難さをブルクハルトが語っている。そして、この連続体は図絵Pinaxの形で形象化するのがもっとも適切であるとしている⁽⁷⁹⁾。若き日にブルクハルトは自分の歴史像を「もっとも美しい絵画的構図の連なり⁽⁸⁰⁾」と表現したことがあった。「ギリシア文化史」序論においては、文化史学の利点は、重要度に比例した諸事実のグループ化や強調を通して、均整のとれたものへの感性を踏みにじることがないことであると主張している。これらの証言は、文化史が提示する歴史像が、美しい構成をもった全体像であることを指している。それは、個々の文化史的事実のたんなる総和ではない。それら類型的なものそれぞれの位置関係をふくんだ全体を、ひとつのものとして認識しているのである。

この全体なるものが、合理的に説明可能なものだけから構成されているのではないということは、文化史学固有の特徴である。そこには謎や神秘といった言葉が使用される微妙な領域が存在している。そのことは、文化史学が不合理なものや迷信的なものを無批判に受容していることを意味してはいない。その一方で、合理的な手続きによって証明されるものだけを真理とするような「科学的」態度もとっていないのである⁽⁸¹⁾。このよう

な態度は、文化史学が過去に対して偉大さを認めている歴史的知であることに由来するであろう。偉大さは特定の個人たちを通してあらわれたが、その尋常ならざる偉人たちの行為と影響には、通常の人間にとって理解を超えるものであり、「魔力的⁽⁸²⁾」と形容せざるをえないものとして感じられる。ブルクハルトは、認識者を神のごとき絶対的な立場におかず、まずその認識能力の限界を明察することを出発点としている。それによれば、人間の認識は主体がおかれている状況や立場によってしばしば左右され、権力の強い影響力に幻惑されることもある。「意図」的な見方に陥ることも多く⁽⁸³⁾、関心を利害関係から切り離すことは難しい。そのような人間の「弱い器官⁽⁸⁴⁾」にとって、歴史における偉大さは、その多くが謎にとどまり、歴史における高次の必然性は、それが存在するとしても、的確にとらえることはできない⁽⁸⁵⁾。これらの事実を直視するとき、歴史認識者は対象に対していかなる姿勢をとるべきであろうか。

この難問にひとつの解決策を示したのが、「わたしたちの内なる畏敬の力⁽⁸⁶⁾」であった。高次のものから良きものを受容しようとするその力は、偉大な存在を歴史認識から排除したりはしない。また特定のドグマや理念から対象を解釈して、歴史像に強引に当てはめるようなこともしない。それをできるだけありのままの形で歴史像のなかにとどめようとする。それゆえ、その全容を無理に解き明かすことなく、対象と向き合うことを要請するであろう。このような姿勢と両立しうる認識手段は、「予感Ahnung⁽⁸⁷⁾」である。それは偉大な対象の存在を直観的な仕方でも認識するが、それ以上の穿鑿を差し控えるがゆえに、対象の全体性を傷つけることがないのである。ブルクハルトは、そのような認識手段の正当性を確信し、それが行使されうる領域を文化史学の歴史像のなかにおいた⁽⁸⁸⁾。これにより、偉大であるがために完全に解明されることのない存在、多種多様な「知るに値するもの⁽⁸⁹⁾」が放逐されることなく「予感領域」ともいべき場所に存在することができた。そのため、それらの対象が認識主体に作用することも妨げなかったのである。

三つのポテンツと予感領域によって、多彩な形態をもった複雑な歴史的生成が、ひとつの均整のと

れた歴史像に統合される。その歴史像が結ばれるのは、認識者の内面世界においてである。すでに文化史的事実の個別認識においてさえも、それが認識者の成熟度に高度に依存していることをブルクハルトは指摘している⁽⁹⁰⁾。それらをしかるべき位置に布置した一つの全体として認識するには、どれだけの内的成熟を必要とするであろうか。その全体像が、偉大なものを数多く内在させていればいるほど、それを内面化することには、多大な精神的集中が要求されることであろう。見方を変えれば、そのような全体像を認識しようとする行為そのものが、認識者の内的成長を促進せざるをえない性格をもっているといえるだろう。実際、ブルクハルトは歴史教育の実践において、聴講者の内的成熟度を最重視してきた。文化史学の構造的特質は、そのような教育実践と不可分である。それは歴史認識を通して生じる認識者の内的変容、より高次なものに向けての成熟という目的に対応したものであったのである。

7. ディレッタンティズム ―歴史術としての文化史学

歴史教育者としてブルクハルトは、学生ひとりひとりに主体的な歴史認識を促し、その手ほどきすることに自らの大学教員としての責務をおいていた。文化史学とは、そのような学生が「生涯にわたる教養と享受⁽⁹¹⁾」のためにおこない続ける自己教育としての歴史認識の方法である。それゆえブルクハルトは、認識主体の自然な成長過程にできる限りの配慮をしてきた。文化史学における史料の読み方にかんして、全体的に網羅的に読むこと、無理に成果を引き出そうと努力するのではなく「軽い傾聴⁽⁹²⁾」がもっとも人を先に進めると助言している。研究の開始点にかんしては「とにかく、どこからか」とまったく学生の任意に任せている⁽⁹³⁾。研究の方法にかんして、各人の精神的生涯の道程にしたがって形成するのがよいとしている⁽⁹⁴⁾。ここでは、学問のあり方そのものが、個々人の内的成長を中心原理として調整されているのである。

この立場に立つとき、歴史学の科学化・職業化が招来した歴史知の巨大化と公的事業化は、知の

内実を脅威にさらすものであった。それは質と量両面において内面化することが不可能なものとし、「歴史的知識と人間能力の対立」を招いた。内面化されない専門知は、生の外側に蓄積し、生を圧迫しつつある。そのためブルクハルトは最高の才能を集中した「千人の生涯を費やしてもまだあまりある⁽⁹⁵⁾」出来事から、類型的な文化史的事実に認識対象を引き上げるとともに、さらに認識対象の範囲を個人化することによって、これに対処しようとした。すなわち認識対象の選択を、普遍的な知的構築物との関係ではなく、個々人の内的関心にしたがって選択すべきこと、個々の精神と真に化学的結合をもちうる過去を研究対象とすべきことを提言しているのである。

そのような認識主体と対象の主観的な「個人的関係 ein persönliches Verhältnis⁽⁹⁶⁾」は、もはや文化史学が、科学という知的営為の圏内に存立しえないことを指し示している。それは歴史的知と個々人の内的関係を再興するために、意識的に「非科学的な」立場に立とうとした。そのため文化史学は、歴史「学」ではなく、個人の内面を軸として知を再編する歴史「術」ともいべき学的性格を帯びたのである。それは第三者に客観的な知見を提供するためにではなく、まず自身の内的成長のために歴史認識をする。それゆえ独自の体系や厳格な専門的方法も、あえて定立しない。基本的な視点と史料の用い方を手ほどきするだけで、あとは個々人の内的必然性に一切を任せるのである⁽⁹⁷⁾。それゆえ文化史学は、個々人の个性的発展と不可分なものとなり、その研究成果はきわめて個人的内面的な価値をもつはずである。だがそれは、認識者の数だけ研究手法のバリエーションが生じることをも許容する。専門研究者集団が研究事業を公的に独占する時代において、そのような知的営為は、私的なディレッタンティズムとみなされよう。それは正統な研究活動の枠からはずれた劣位の知的営為を指す蔑称であった。それをあえて自らの歴史教育の方向に付与した点に、ブルクハルトの時代に対する姿勢がうかがわれる。

ディレッタンティズムが非難的となるのは、その研究が個人的主観的な目的と方法によってなされるためである。その対極に位置するものは、公的事業としての知的生産に参画する専門研究者

の労苦であった⁽⁹⁸⁾。彼らの研究は、要求される水準、方法、テーマ、さらには思考・行動様式といったものまでが、外在的なものとしてある。専門分化の進行は、ひとりの研究者が担当すべき専門分野を極小化した。専門研究者は専門職としての職業倫理を支えに、自分の内的要求の充足を一部断念して、そのような公的研究事業に適応した。彼らの日々の労苦は、歴史学の科学としての認知に対する代価であった。ディレクタントの私的な研究活動が非難されるのは、それが科学化以前の歴史研究への逆行として、近代歴史学の名望を傷つけるおそれがあるからである。だが、それだけではない。実はディレクタントとは、専門研究者が研究体制に適応する際に放棄した自分の半身なのである。彼らが享受する私的研究の喜びは、専門研究のために断念した自身の内的欲求をもあらわしていた。ディレクタントの存在理由は、まさにそこにある。彼らの営為は、専門研究が科学域外に放逐した歴史的知の本質的部分を救済することができるのである。トゥキユディデスの時代であるならば、それらすべてをひとりの歴史家が実現することも可能であったかもしれない。だが、革命時代の科学をめぐる社会的条件は、もはやそれを許さなくなった。ディレクタントは、その私的な研究行為を通して知の非科学的部分を担い、歴史的知の全体を補償する役割を果たすことができる。その意味において、歴史術としての文化史学は、彼らに「特別な学問上のチャンス⁽⁹⁹⁾」を提供するものといえるのである。

ブルクハルトが正教授を務めるバーゼル大学は、ドイツ語圏の大規模な科学研究体制において周縁に位置する「小さな大学」であったが、人文主義的な知的実用主義の伝統を受け継ぎ、市民に対する成人教育を重視する教養教育型大学であった⁽¹⁰⁰⁾。彼の選択は、そのような場において、ディレクタント育成を社会的実践として行うことである。それは歴史の実用主義を高次にかつ広範に実践することで、「歴史病」に対する解毒作用をもたらすことが期待された。同僚ニーチェの問題提議に対して、ディレクタンティズムの語をもって応えていることは、その脈絡において理解されなければならない。現代の職業生活において人は誰も特定分野の専門家にならざるをえない。とはいえ、

ある分野の専門家が別の分野のディレクタントを兼ねることは可能であろう。ブルクハルトの文化史学は、「大学教育を受けたすべての人々⁽¹⁰¹⁾」を対象とした基礎教育的な歴史教育に用いられた。中等教育課程において古典語教育を受けたこれら「教養ある市民層」には、職業的な専門業務とは別に、ひとつの社会層として果たすべき特別な社会的責務がある、と彼は判断している。それは「歴史的なものの研究」が可能な階層として、社会の一角で過去との精神的連続性を生き生きとしたものとして保持することである。歴史学の科学化が、その役割を科学域外に放逐し、革命時代のたえざる社会変動が、歴史的なものを白紙還元しようとするとき、そのような連続性が存立しえる場合は、どこにあるであろうか。ブルクハルトは、ディレクタントとして歴史を学ぶ教養層の内面にそれを求めた。文化史学は、彼らが固有の社会的責務を果たすための学知としてあったのである。

おわりに

19世紀の激しい社会変動によって、歴史的なものに対する社会的要請は、かつてない高まりをみせていた。そのような社会状況も歴史学の発展を促す一要因であった。歴史学の大学における講座は増設され、中等学校における歴史の教科時間数も漸増した⁽¹⁰²⁾。それにともない大学教授や中等学校教員といった研究・教育の専門職もまた増員傾向にあった。このような「歴史の世紀」が、歴史的知が本来担ってきた生に対する実用主義的役割をむしろ危機にさらしていることを洞察したのが、ニーチェでありブルクハルトであった。歴史的知は高度専門化することによって、本質的内実を喪失しつつある。ブルクハルトは、専門研究者による科学的な歴史研究に対して、ディレクタントによる歴史術的な文化史研究を対置することによって、そのような知の歪みを是正しようとしたといえるであろう。

職業的強制にさらされないディレクタントは、自分の内的必然性に適った「個人的関係」にある過去だけを研究できる点で、専門家にはない強みをもっていた。彼らが探究する対象は、真に関心がもてるものであり、深い内的関係に入ることが

できるものである。それゆえ、それは愛情に値するものであるといえよう。「ディレクタントは、事物を愛するがゆえに、生涯の間にさまざまな立場で真に深まることもおそらく可能となるであろう⁽¹⁰³⁾」。ディレクタントの知に対する姿勢は、「多くを知るのではなく、多くを愛すること⁽¹⁰⁴⁾」であった。この愛には対象の偉大さに応じて、畏敬の念がふくまれている。そして、それは認識者の内面を根底から変容させる力さえもっているのである。

個々の人のたましいは、神を認識することによって、神を自分の狭い限界のなかに引き寄せることができる。だが、神への愛によって、自分を無限に拡大することもできるのである。そこに地上の浄福がある⁽¹⁰⁵⁾。

この文言は、ルネサンスの精神的エリートたちが宗教的混沌のさなかに行き着いた個人的宗教の立場について論じた際に、ブルクハルトが書き添えたものである。それは、愛を通した内的変容の可能性について力強く語っている。その変容は地上的な個我から人間を解放し、広大な存在へと導いていく。これは成熟というものの究極の姿であろう。成熟すること、それは幸福という観念にきわめて慎重であったブルクハルトが、この不完全な地上生活に認めた数少ない「幸福」のひとつであった。ニーチェ宛書簡において述べられた「何かしらの幸福」は、これらのことを歴史教育者ブルクハルトの営為に結び付けているとはいえないだろうか。すなわち、個人的歴史、歴史術としての文化史学に。

註

- (1) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke*(GW.), Bd. I, Basel/Stuttgart 1978, S.IX.「筆者はとりわけ学者のためではなく、すべての階層の考える読者たちのために本書を書いた。彼らは、完全に仕上げられた形象(Bild)を与えることができるような叙述に、ついていくことをつねとしているのである」。
- (2) 文化史学の教育的側面を重視しているのは、わずかにリュゼンヤムラックらである。Vgl. Jörn Rüsen, Jacob Burckhardt, in: H.-U. Wehler (Hg.), *Deutsche Historiker*, Bd. III, Göttingen 1972; 末川清訳「ヤーコプ・ブルクハルト」(『ドイツ現代史研究会訳『ドイツの歴史家』第2巻、未
- 来社、1983年所収)。Ulrich Muhlack, *Bildung zwischen Neuhumanismus und Historismus*, in: Reinhart Koselleck (Hg.), *Bildungsbürgertum im 19. Jahrhundert*, Teil II, Stuttgart 1990.
- (3) Jacob Burckhardt, *Briefe. Vollständige und kritische Ausgabe. Mit Benützung des handschriftliche Nachlasses, bearbeitet von Max Burckhardt*(Br.), Bd.V, Basel/Stuttgart 1963, S.222, an Friedrich Nietzsche vom 25. Feb.1874.
- (4) Karl Löwith, *Sämtliche Schriften*, Bd.7, Stuttgart 1984, S.50f.
- (5) Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*(SW), Bd.1, Nördlingen 1988, S.252.
- (6) Vgl. Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Briefe. Kritische Studienausgabe*, Bd.3, Berlin 1986, S.155, an Carl von Gersdorff in Frankreich vom 7. Nov.1870.
- (7) *SW*, Bd.1, S.329.
- (8) *Br.*, Bd.V, S.223, an Friedrich Nietzsche vom 25. Feb.1874.
- (9) 歴史の生に対する作用(*SW*, Bd.1.S.258; *Br.*, Bd.III, Basel 1955, S.68, an Gottfried Kinkel vom 17. April 1847)、歴史の科学化(*SW*, Bd.1, S.271; *Br.*, Bd.III, S.67f., an Gottfried Kinkel vom 17. April 1847)、成熟の阻害(*SW*, Bd.1, S.298; *Br.*, Bd.III, S.46, an Gottfried Kinkel vom 9. Dec. 1846)、ニーチェが『歴史の利益と弊害』で提示したこれら三点について、ブルクハルトはすでに青年期より問題意識を抱いており、それを自分の学問や時代に対する姿勢に反映させてきた。
- (10) Jacob Burckhardt, *Über das Studium der Geschichte. Der Text der > Weltgeschichtlichen Betrachtungen < auf Grund der Vorarbeitung von Ernst Ziegler nach den Handschriften herausgegeben von Peter Ganz*(SG.), München 1982, S.248; *GW*, Bd.V, S.4.
- (11) *Br.*, Bd.V, S.222f., an Friedrich Nietzsche vom 25. Feb.1874.
- (12) *SG.*, S.252f.
- (13) Jacob Burckhardt, *Historische Fragmente. Aus dem Nachlass gesammelt von Emil Dürr*(HF.), Stuttgart 1957, S.198; *GW*, Bd.V, S.7.
- (14) *SG.*, S.278.
- (15) *Ebd.*
- (16) *Ebd.*, S.383.
- (17) *Ebd.*, S.280.
- (18) *Ebd.*, S.225f.
- (19) *Ebd.*, S.293, Anm.1.
- (20) *Ebd.*, S.285; *GW*, Bd.VII, S.395.
- (21) *SG.*, S.285.
- (22) *Ebd.*, S.285, 383.
- (23) *Ebd.*, S.252; vgl. *GW*, Bd.V, S.9.さらにまた青年期の書簡で、「わたしにとって歴史は、そのほとんど大部分が詩です(*Br.*, Bd.I, Basel 1949, S.204, an Willibald Beyschlag vom 14.Juni 1842; vgl. *ebd.*, S.208, an Karl Fresenius vom 19.Juni 1842)」と明言していることも、参考とすべきであろう。この文言は、ベルリン大学のランケの下で徹底した批判的方法を学んだ上で書かれたものである。

- (24) *SG.*, S.229.
 (25) *Ebd.*
 (26) *Ebd.*, S.378.
 (27) *GW.*, Bd.V, S.10; *SG.*, S.252.
 (28) *Br.*, Bd.I, S.204, an Willibald Beyschlag vom 14.Juny 1842.
 (29) *SG.*, S.248.
 (30) *GW.*, Bd.VII, S.400, 408f.
 (31) *Ebd.*, S.413.
 (32) *Ebd.*, S.396.
 (33) *Ebd.*, S.395f.
 (34) *Ebd.*, S.413.
 (35) *Ebd.*, S.396.
 (36) *Ebd.*, S.397.
 (37) *GW.*, Bd.V, S.11; *GW.*, Bd.VI, S.371f.
 (38) *GW.*, Bd.VII, S.394; *GW.*, Bd.V, S.12.
 (39) *GW.*, Bd.VII, S.408f.
 (40) *Br.*, Bd.V, S.119f, an Friedrich von Preen vom Sylvester 1870.
 (41) カール・ヨエルは1868年から1873年までをブルクハルトの「哲学的五年間 (das philosophische Lustrum)」と名づけ、この時期に彼の思想的立場が確立したことを指摘している (Karl Joël, *Jakob Burckhardt als Geschichtsphilosoph*, Basel 1918, S.63f.)。これは、ドイツ帝国創立期と重なっており、ブルクハルトが政治社会的な事柄に強い関心を抱いた時期でもある。領邦国家体制が崩壊し、中央集権的な国民国家へとドイツ諸国家が統合したことは、彼にとって多様性をとどめ精神文化に自由な土壌を提供してきた「母なるドイツ」の終焉を意味した。さらにそれはヨーロッパという歴史的世界全体の変質をも予示していた。文化史への道は、そのような時代に対する厳しい対決姿勢のなかで決意された。ベルリン大学からの招請 (1872年) をブルクハルトが固辞したのも、この時期の出来事である (vgl. Kaegi, *Jacob Burckhardt. Eine Biographie*, Bd.IV, Basel 1967, S.29-33)。
 (42) *GW.*, Bd.VII, S.416f.
 (43) *GW.*, Bd.V, S.4.
 (44) *Ebd.*
 (45) *HF.*, S.199.
 (46) *GW.*, Bd.III, S.165.
 (47) *SG.*, S.227.
 (48) *Ebd.*, S.249.
 (49) *GW.*, Bd.V, S.5.
 (50) *SG.*, S.228.
 (51) *Ebd.*, S.227; *GW.*, Bd.V, S.6.
 (52) *SG.*, S.237.
 (53) *Ebd.*, S.238.
 (54) *Ebd.*, S.239-245.
 (55) *Ebd.*, S.245.
 (56) *Ebd.*, S.111.
 (57) *Ebd.*
 (58) *Ebd.*, S.246.
 (59) *GW.*, Bd.III, S.96.
 (60) 仲手川良雄著『ブルクハルト史学と現代』創文社、1977年、297-298頁を参照のこと。
 (61) これらの形象は、対象がもつ普遍性に依拠して、時代特性的なものや普遍的なものを浮かび上がらせる。たとえばアイスキュロスとソフォクレスは永遠の普遍性をあらわし、エウリピデスは時代特性をあらわすと考えられている (*SG.*, S.387, Anm.35)。
 (62) *Ebd.*, S.263. また、つぎのブルクハルトの文言を参照のこと。「人類という論理的な概念ならば、人はむかしからもっていた。しかし、ルネサンスは事実そのもの (die Sache) を知っていたのである (*GW.*, Bd.III, S.241)」。この場合「事実そのもの」とは、類型を通して語られる豊潤な意味内容を指し示している。
 (63) *SG.*, S.245.
 (64) *Ebd.*, S.226.
 (65) *Ebd.*, S.230; vgl. *HF.*, S.278.
 (66) *SG.*, S.225.
 (67) *Ebd.*, S.229.
 (68) 「真に学ぼうとする者、すなわち、精神的に豊かになろうと欲する者 (*ebd.*, S.251)」。ブルクハルトは、たえず美と偉大さの観照が内面を成熟させ、また、それを通して名声欲 Ehrgeiz も虚栄心 Eitelkeit の段階から名誉欲 Ruhmbegierへと止揚する可能性を示唆している (*Br.*, Bd.III, S.226, an Albert Brenner vom 17.Oct.1855)。美は美術史、偉大さは文化史という、彼がバーゼル大学において担当する教育の二領域に呼応している。
 (69) *SG.*, S.245, Anm.25. この言葉が「能力ある者の目的は、どうしても、幸福ではなく認識である」に続けて記されていることは重要である。ここで文化史的認識と成熟が不可分の関係にあることが指し示されている。
 (70) *Ebd.*, S.247f. ここに19世紀特有の外的な好条件が付加される。それは文書館の整備と利便性、旅行による記念物へのアクセス容易化、外国語教育の普及、写真技術の発達であり、国家・宗教の聖俗権力もさしあたっては、このような研究を妨げることがないことである (*ebd.*, S.247)。
 (71) ヴェルナー・ケーギ著、坂井直芳訳『世界年代記 中世以来の歴史記述の基本形態』みすず書房、1990年、105-106頁。
 (72) *SG.*, S.276.
 (73) *Ebd.*
 (74) *Ebd.*, S.277; vgl. Ernst von Lasaulx, *Neuer Versuch einer alten, auf die Wahrheit der Tatsachen gegründeten Philosophie der Geschichte*, München 1952, S.132f.
 (75) *HF.*, S.193.
 (76) Vgl. *GW.*, Bd.III, S.292.
 (77) *SG.*, S.293.
 (78) *GW.*, Bd.V, S.7; vgl. *GW.*, Bd.III, S.1.
 (79) *GW.*, Bd.V, S.7.
 (80) *Br.*, Bd. I, S.204, an Willibald Beyschlag vom 14.Juny 1842.
 (81) これに対してブルクハルトは、別の意味でもっと危険な妄想に陥っていないかと疑問を投げかけている (*GW.*, Bd.VII, S.391)。
 (82) *SG.*, S.378.
 (83) ブルクハルト史論において、意図 Absichten と認識 Erkenntnis は、対立概念である (vgl. *ebd.*, S.110)。「卑俗

- な主体」たる意図の世界に陥ることなく、客観的な事物の認識に開かれていることを文化史・美術史考察の主要条件とブルクハルトはしている (vgl. *ebd.*, S.161; Jacob Burckhardt, *Gesamtausgabe* (GA.), Bd.XIII, Berlin und Leipzig 1934, S.27)。
- (84) *SG.*, S.238, Anm.12.
- (85) *Ebd.*, S.261.
- (86) *Ebd.*, S.244.
- (87) *Ebd.*, S.111, 246, 251.
- (88) 「わたしたちの予感においては明白だが、あとづけることは不可能である (*ebd.*, S.111)」。
- (89) *Ebd.*, S.293, Anm.1.
- (90) *GW.*, Bd.V, S.6.
- (91) *Ebd.*, S.9.
- (92) *Ebd.*, S.6.
- (93) *Ebd.*, S.7.
- (94) *SG.*, S.227.
- (95) *Ebd.*, S.248.
- (96) *GW.*, Bd.V, S.9. もちろん、このような過去との個人的関係は相互選択的であり、主観的なものであっても恣意的なものではない (vgl. *GA.*, Bd.XIII, S.26)。
- (97) Vgl. *SG.*, S.227; *GW.*, Bd.V, S.7.
- (98) ここには制度化した科学研究の外的要求と個人の内的要求の相克という近代歴史学特有の問題がある。ブルクハルトが優先権を与えた後者には、知識獲得の喜びと楽しみがあったとノールは指摘する (vgl. Thomas Noll, *Vom Glück des Gelehrten. Versuch über Jacob Burckhardt*, Göttingen 1997, S.536-539)。リューゼンは、このような不均衡に対して、ブルクハルトが批判的な詳細研究を一部断念し、「ディレクタント的」「主観的」特徴をもった方法での史料解釈を対置したとしている (Rüsen, a.a.O., S.7f.; 末川訳, 34頁)。さらにムーラックは、このような「歴史教養 Historische Bildung」が、近代歴史学を批判しつつもこれと共存しうることを示唆している (Muhlack, a.a.O., S.84f.)。
- (99) *GW.*, Bd.V, S.8. これに対してはペロウの批判がある (Georg von Below, *Die Deutsche Geschichtsschreibung von den Befreiungskriegen bis zu unseren Tagen*, 2. Auflage, München und Berlin 1924, S.71)。これはブルクハルトのディレクタンティズム論に対する誤解に基づいた批判である。さらにペロウは「歴史はあらゆる学問のなかでもっとも非科学的なもの」というブルクハルトの主張を真面目に受け取っていない (*ebd.*)。これらはドイツ正統史学界の大方の見方を代表していたであろう。
- (100) バーゼル大学にかんしては、拙稿「ブルクハルトの歴史教育活動とバーゼル大学」(望田幸男・橋本伸也編『ネイションとナショナリズムの教育社会史』昭和堂、2004年所収)を参照のこと。ブルクハルトは、歴史研究の制度化により、潤沢な研究資金をもとに専門研究と職業教育に即応した「大きな大学」と、教養教育に対応する「小さな大学」とに、大学が社会機能上二分されたと考えていた。彼はベルリン大学からの招請を固辞した理由として、「わたしのまったくディレクタント的な方法は、大きな大学よりも小さな大学に適しています (*Br.*, Bd.V, S.162, an Jakob Oeri, Sohn vom 17. Mai 1872)」と述べている。
- (101) *SG.*, S.249.
- (102) 19世紀ドイツ語圏大学における歴史学系正教授ポストは、1810年にはわずか5講座にすぎなかったが、1850年には30講座、1900年には90講座に増加している。この間、講座の専門分化も進行し「歴史学 (一般)」講座は1880年の37講座をピークに以後は減少傾向にある (vgl. Wolfgang Weber, *Priester der Klio. Historisch-sozialwissenschaftliche Studien zur Herkunft und Karriere deutscher Historiker und zur Geschichte der Geschichtswissenschaft 1800-1970*, Frankfurt am Main 1987, S.53)。一方、中等学校における歴史・地理科目の週時間 (9年間合計) は、プロイセンの場合、古典語を最重視するギムナジウムにおいても、1837年の24時間から、1859年に25時間、1882年には28時間と漸増している (望田幸男著『ドイツ・エリート養成の社会史 ―ギムナジウムとアビトゥーアの世界―』ミネルヴァ書房、1998年、54頁-57頁参照)。
- (103) *SG.*, S.253.
- (104) Ernst Walter Zeeden, Jacob Burckhardt. Die Persönlichkeit und geistige Gestalt in Urteil und Erinnerung der Zeitgenossen, in: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, Jg. 26, Heft 2 (1952), 246f.
- (105) *GW.*, Bd.III, S.385.